

活動報告 (2019.1 ~ 2019.12)

(1) 所員会議

第1回 2019年5月16日(木)

議題

1. 2018年度事業報告および決算報告について
3. 2019年度事業計画および予算について
4. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
5. 総合郷土研究所利用内規の制定について

(2) 運営委員会

第8回 2019年1月24日(木)

議題

1. 非常勤所員および研究員の継続確認について
2. 図書除籍について
3. 後援依頼について
4. 運営委員の今後の構成について

第9回 2019年2月14日(木)

議題

1. 研究員の新規加入について
2. 図書除籍について
3. 立命館大学受託研究間接経費使用計画書について
4. 科学研究費研究者番号の取得及び科学研究費申請について

追加議題

1. 図書調達管理規定の制定について
2. 引当特定資産残高の寄付について

第10回 2019年3月8日(木)

議題

1. 図書除籍について
2. 地域見学会開催について

第1回 2019年4月25日(木)

議題

1. 2018年度事業報告および決算報告について
2. 2019年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
4. 研究費申請について
5. 図書等購入申請について
6. 2020年度ブックレット執筆希望者の募集について

第2回 2019年5月30日(木)

議題

1. 研究費執行について
2. 図書等購入について
3. 後援依頼について
4. 総合郷土研究所利用申請書について

第3回 2019年6月27日(木)

議題

1. 2019年度紀要第65輯の発行について
2. 豊橋校舎の施設整備について
3. 特別重点研究における資料選定について
4. 2018年度目的別事業評価シートについて

第4回 2019年7月25日(木)

議題

1. 2019年度紀要第65輯執筆者について
2. 2020年度ブックレット執筆者について
3. 2020年度新規事業予算申請について
4. 考古遺物(鉄製品)の保存処理・公開事業の変更について

第5回 2019年9月19日(木)

議題

1. 図書等購入申請について
2. 2019年度補正予算について

3. 2020年度新規事業予算申請について
4. 科学研究費申請について

第6回 2019年10月17日(木)

議題

1. 図書等購入について
2. 2020年度予算申請について

第7回 2019年11月14日(木)

議題

1. 2020年度予算申請について
2. 後援依頼について

第8回 2019年12月19日(木)

1. 非常勤所員および研究員の継続確認について
2. 所長および運営委員改選に伴う選挙管理委員の選出について

(3) 公開講演会

日時：2019年3月23日(土)

13時～14時30分

場所：愛知大学豊橋校舎2号館221教室

講演：愛大郷土研所蔵文書の集積

講師：山田邦明(総合郷土研究所所長、文学部教授)

講演：文書からみた豊橋・渥美の近世・近代

講師：神谷智(総合郷土研究所所員、文学部教授)

日時：2019年7月20日(土)

13時30分～15時

場所：愛知大学豊橋校舎本館第3・4会議室

演題：平湯今昔物語—奥飛驒の温泉と伝説と祭り—

講師：菱川晶子(総合郷土研究所研究員)

日時：2019年12月7日(土)

13時30分～16時

場所：愛知大学豊橋校舎6号館610教室

演題：大規模自然災害から地域の歴史資料を救う

講師：松下正和(神戸大学地域連携推進室特命准教授)

(4) 刊行物

愛知大学総合郷土研究所紀要 第64輯

平湯今昔物語—奥飛驒の温泉と伝説と祭り—(ブックレット28)

愛知大学総合郷土研究所蔵文書目録2

三河の農書(ブックレット29)

(5) 地域見学会

文責：近藤暁夫

日時：2019年5月19日(日)

テーマ：君は渥美郡を知っているか

見学地：愛知県豊橋市・田原市(図1参照)

参加者：24名(学生14名)

■企画概要

地域見学会は、毎年郷土研の対象範囲である東海5県から幅広く見学地域を選定しているが、本年度においては、遠出ばかりでなく一度足元を見直すことも必要だろうとの観点から、郷土研(愛知大学豊橋キャンパス)が立地する「渥美」に焦点を当て、その歴史と地域の特徴を今一度確認・再発見することを目的に、企画を立案した。参加者数は昨年度とほぼ同数で、アンケートでも回収20件中「大満足」との評価が15名から寄せられた。参加者に占める学生の比率が高かったことを含め、全体として企画の目標は達成できたものとする。

■当日のタイムスケジュール・見学地

当日のタイムスケジュールと行程を表1、図1に示す。以下、簡単に当日の行程と内容を説明する。

例年通り、午前9時に愛知大学豊橋キャンパスに集合し、大型バスに乗り、出発する。例年は愛知県外を含む目的地までの移動に多

くの時間が割かれるが、本年度については「渥美郡」が対象のため、バスの発車と同時に地域の見学が開始された（事務的観点から付言すれば交通費も抑えられる）。

車中では、まずスタッフの挨拶ののち、沿道の車窓景観の解説を適宜加えながら、パンフレット（A4版で12ページ）をもとに当日のスケジュール等について説明を行った。資料等を用いての説明は主に近藤が行ったが、歴史に関する部分は山田邦明所長ならびに廣瀬憲雄所員の解説を仰いだ。教員間の丁々発止のやり取りも近年の地域見学会の見どころのひとつである。

今回見学会の対象となる渥美郡は、旧三河国を構成していた八郡のひとつで、三河国のうち渥美半島（田原市）の全域と、豊橋市の朝倉川以南（概ね吉田城から南側）の領域にあたる（図1）。南北約15km、東西約45kmにまたがる広大な郡で、内湾の三河湾と外洋（太平洋）に面する細長い地勢が特徴である。

渥美郡には先史時代から三河湾岸を中心に人々の生活の痕跡が確認できる。渥美に類する地名が確認できるのは古代からで、平安中期の『和名類聚抄』には「阿豆美」とある。元来は「飽海郡」と呼ばれていたが、奈良時代に「渥美」の字を当てられたものと考えられる。飽海の地名は現在も豊橋市の吉田城近辺に残っており、平安時代には伊勢神宮領（神戸）であった。現代の人々は「渥美」の名を聞いた場合、半島部を連想しがちだろうが、渥美郡の名自体は東端の豊橋市域に発祥する。郡内への伊勢神宮領の存在にみられるように、伊勢湾・三河湾を挟んだ対岸に位置する伊勢神宮との関係が歴史的文化的に強く、江戸時代には伊勢参りの有力な経由地としても機能した。

バスは、豊橋キャンパスから三河港（豊橋港）沿岸の工業地区を抜け、吉胡貝塚ならびに資料館（シェルマよしご）に到着した。吉胡貝塚は、縄文時代晩期の貝塚で、300体以

上の縄文人骨が出土したことで全国的に知られる。三河湾の内湾である田原湾に面し、貝塚の目の前は現在も貝類の良漁場が広がっている。三河湾、特に沿岸部の干潟が日本最大のアサリ産地であることからみられるように、そこで採れる貝類（なお、吉胡貝塚で最も多く出土した貝類はハマグリである）の多さが、早くから渥美の地に多くの人口の蓄積をもたらしたことが、現地から湾や干潟を眺め、貝層の堆積の厚さを確認するほど実感できる。2007年には貝塚に隣接して資料館（シェルマよしご）が開館している。途中、雨がぱらつく天候となったが、廣瀬所員の解説・案内もあり、限られた時間の中、参加者は貝塚と資料館の展示を眺め、原始時代から先進的地域であった渥美の豊かさと蓄積されてきた歴史の厚みの一端を確認した。

30分程度の貝塚での滞在ののち、バスは田原の市街地を抜け、田原城（三河田原藩3万石の居城）跡を確認しながら、次の目的地の福江に向かう。渥美半島の三河湾側の先端近く、入江となった場所に位置する福江は、旧渥美町の中心集落で、江戸時代には大垣新田藩の陣屋（畠村陣屋）が置かれた土地である。

江戸時代の渥美半島は、小藩や旗本の領地が錯綜する土地であった。江戸時代初期、旧渥美町付近で最大の知行地を持っていたのは大垣藩戸田氏（戸田氏は戦国時代に田原を拠点に渥美半島を支配した経歴を持つ）の分家にあたる旗本戸田氏で、畠村を中心に5村1,500石を領有していた。1688年（元禄元年）、戸田氏は美濃や三河など各地の所領を合算して1万石を超えたため、旗本から大名に昇格する。藩庁は渥美郡畠村（現在の福江）に置いたが、当初の所領が大垣周辺の方が多かったことから、藩名は「大垣新田藩」となった。

藩庁となった畠村陣屋は確かに大名の陣屋であったが、戸田氏が旗本時代と同様に江戸に滞在し続け畠村陣屋に居住することもな

く、陣屋といっても常駐家臣は数名程度という簡素なものであった。明治になると陣屋はあっけなく破却され、跡地は酒造会社等を経て現在公園として整備されている。午前11時ごろ到着した一行は、陣屋跡の公園や武家屋敷の見当たらない街並みを見学し、壮大な城郭だけが取り上げられがちな日本史の教科書等で仕入れた知識ではわからない、大名の居城や陣屋にも多様な形態があった事実を現地で実感することとなった。

昼食は、福江にある料理旅館「井筒楼」で、建物の見学を兼ねて取った。福江港は、江戸時代には奥郡（渥美半島西部）の商業ならびに行政の中心として機能した。当地で活動した商人は主に尾張商人で、渥美の織子に木綿を発注し、それを知多に一度運んで「知多木綿」として全国に出荷するなど、彼らを通じた全国的な商業ネットワークに渥美・福江は組み込まれながら繁栄する。商業のまちとしての福江は、昭和40年ごろまで繁栄をみた。今日、商業面で昔日の面影をみることは難しいが、建物が海岸線と並行して立ち並ぶ、港湾に面した商業的集落独特の街並みは健在である。

古来、港町は花街的性質を有し、多くの宿屋や料理屋が殷賑を極めた。福江にも多くの旅館が立地したが、その中でも井筒楼と、その本店的な位置付けにある角上楼は代表的な存在である。ともに現在の母屋は江戸期から昭和期にかけての建築で、往時の賑わいを反映して、庭の間取りや床材の材質など、非常に豪華な造りになっている。現在も料理店(井筒楼では渥美半島の特産の豚肉料理が堪能できる)ならびに旅館として営業しており、『ミシュランガイド愛知・岐阜・三重 2019特別版』で3つ星相当の宿として国際的な格付けを得ている。簡素になりがちな見学会の昼食であるが、今回は近世・近代の当地の歴史を実感できる建築物の中で、渥美特産の豚肉の料理を食べるといふ、贅沢な時間となった。

昼食後、バスは渥美半島の先端の伊良湖岬に向かう。福江と伊良湖岬の中間にあたる伊良湖地区には、1901年に日本陸軍によって当時日本最大規模の射撃試験場が設置された。ここでは射程10kmの大砲を用いた訓練がなされたが、これだけ長大な距離での訓練を可能とする平坦かつ広域交通が可能な土地は全国でも少なく、伊良湖が選定された経緯がある。しかし、それは試験場内にあった旧伊良湖の集落が移転を余儀なくされるなど、地元の負担をとまなうものであった。第二次世界大戦後、射撃場跡地は旧満州等からの引揚者を対象にした緊急開拓地となり、計画的な路村状の集落と短冊状の耕地、防風林が連続する景観に一変している（射撃場跡地には火力発電所やゴルフ場も立地している）。バスの車窓観察からでも、常に全国各地とつながりを持ち、それゆえ国策にも翻弄された渥美の歴史の一面を確認することができた。

伊良湖岬の近くには、国史跡「伊良湖東大寺瓦窯跡」がある。良質の粘土が採れる渥美半島は、尾張の猿投窯の影響を受けて窯業が開始され、鎌倉時代には日本を代表する窯業地域に成長した。出土陶磁器として唯一国宝指定を受けている渥美窯産の「秋草紋壺」が川崎市の出土であることからわかるように、渥美半島産の良質の陶磁製品は全国に広く流通していた。源平の争乱で焼失した東大寺大仏殿の瓦もまた、窯業が発達し水運にも適した当地で広く生産されたと考えられる。「伊良湖東大寺瓦窯跡」は1966年のダム工事にともなって発見された遺跡だが、当時には半島各地にこのような窯が立地していただろう。10分程度の短い滞在ではあったが、渥美が日本最先端の工業地域であった時代をしるすには十分であった。

バスは伊良湖岬の三河湾側にある道の駅「伊良湖クリスタルポルト」で参加者を下ろした。参加者は徒歩で伊良湖岬を回り、岬の南側（遠州灘側）の恋路ヶ浜まで移動する。

古来伊勢と強い関係を持っていた渥美郡にとって、西端の伊良湖岬は「郡の最果て」というよりも、「伊勢への玄関口」としての性格を強く持っていた。今日でも、伊良湖からは国道42号が海上を伊勢方面に走り、直接にも伊勢湾フェリー等の海路で両岸が結ばれている。また、伊勢湾・三河湾は世界的な港湾（名古屋港・三河港）を2つ抱えており、その出入口にあたる伊良湖水道は日本の物流の重要地点になっている。伊良湖岬には伊良湖灯台があり、航行の安全に寄与している。また、当地に流れ着いたヤシの実から童謡「椰子の実」がつくられたという柳田国男や島崎藤村の逸話は著名だが、それ以外にも伊良湖は万葉集の時代から歌や詩の舞台となってきた。今日、伊良湖岬周辺には多数の歌碑が置かれている。当日は対岸の神島や鳥羽・伊勢も展望することができ、参加者は伊良湖の地理的特徴と詩碑・歌碑を各々自由に見学していた。

伊良湖岬の南側に位置する恋路ヶ浜の由来は不明だが、江戸時代にはすでに「恋人」に関する伝承があったようで、2006年には「恋人の聖地」にも選定された。当日、参加者はかき氷（名店がある）を頬張りながら、「聖地の巡礼」も行ったのち、恋路ヶ浜駐車場に移動してきたバスに乗車、出発した。

伊良湖岬から愛知大学までは帰路になるが、地域見学会らしく同じ道は通らないこととし、表浜（太平洋）沿いの国道42号を使って豊橋方面に向かった。都合、三河湾沿いから伊良湖岬を折り返し点に遠州灘沿いまで、渥美郡を反時計回りに一周する行程となる。余裕があれば途中の道の駅「あかばねロコステーション」に立ち寄る予定であったが、時間の都合で通過した。

太平洋の荒波を受けて断崖状の海岸が発達する表浜は、これまでバスが通ってきた三河湾沿いの道路とは沿道の景観も大きく異なる。全体として高燥の耕作に適しているとは

いいがたい土地であるが、表浜沿いでは日照をいかした温室メロン栽培と電照菊栽培が発達し、日本最大の農業地域の中核として発展した。これには土地の人々の努力はもちろんだが、1968年に通水した豊川用水の役割も大きかった。今日、旧渥美郡（田原市、豊橋市）の一带はキャベツ、メロン、トマト、花卉等を生産する日本最大の農業地域として確固たる地位を占めるに至っている。沿道の車窓からも、台地上に一面に広がる畑と温室を確認することができた。

当地の農業を支える豊川用水（渥美半島を流れているのは豊川用水東部幹線水路）は、南側が高所になっているという渥美半島の地勢を反映して、半島の南端部、今回の帰路である国道42号沿いを流れている。このうち、半島の付け根の位置にある万場調整池は、1997年に竣工した豊川用水の水量調整用のダムで、農業用水のほか工業用水、水道水の調整にも用いられている。台地上につくられたダムのため、平地に巨大な人工プールが展開しているような特異な景観を示し、周辺にテニス場等のスポーツ施設も設けられていることもあって市民の憩いの場となっている。当日は、駐車場にバスを停めて徒歩で見学する予定であったが、イベントのためにいつになく駐車場が満車で、やむなく車窓での観察となった。こののち、一行は新設された豊橋市初の道の駅「道の駅とよはし」や豊橋技術科学大学の脇を通り、万場調整池で下車しなかったこともあって当初の予定よりも若干早く17時に愛知大学豊橋キャンパスに無事帰着した。

■参加者のアンケートから

参加者（スタッフを除く）に配布したアンケートから、感想を簡単に紹介したい。

表2にあるように、企画に対する参加者からの評価は高く、来年度の参加にも前向きな回答が非常に多かった。これは例年もみられる傾向であるが、今回アンケート回答者の大

多数が学部生であることを加味すると、このような好意的な評価や参加への積極的姿勢は、総合郷土研究所の地域見学会が、学生に知的刺激を与え自発的な学びを促すという教育面においても一定の成果を上げているものと判断できる。これは、地域見学会が所員の研究の枠を超えた意義を持っている企画であることを再認識できる。ただし、学生参加者の絶対数という点では、豊橋キャンパスに通っている学生全体の1～2%の参加率というのはやはり少なすぎる。5月開催だと特に新入生への周知には限界があるが、主催者側からの、地域見学会の意義と学生も参加できるという情報をどのように円滑に周知させ、参加を促すかが引き続き課題である。

今回の参加者には、「チラシ・掲示をみて」参加を決意したとの回答者の比率が高く、自発的な参加が多いのは喜ばしい。その反面、昨年度よりも増えたとはいうものの、全体として口コミ等の参加の広がりには欠け、これが全体の参加者数が劇的に増加しない一因だろう。企画の質については概ね高評価が得られているので、それを十分に伝えて口コミの連鎖につなげ、参加を促すための広報体制の構築や、リピーターの確保が今後とも重要だと考えられる。特に今年度は「来年度もぜひ参加したい」という前向きな評価を参加者の6割から得られたので、この層を固定客とし、そこから更なる口コミ等を通した参加者の拡大につなげていきたい。

個別の感想では、例年同様に企画内容への評価が高かった。例えば、「先生方の説明が興味深く、また地理だけでなく歴史や和歌についても学べた」「様々な時代のものを、先生方のお話とともに見ることができ、とてもおもしろかった」「先生方のマニアックな話がきけてとてもおもしろかった」「専門家である先生方のお話を聞くことができ勉強になった」など、通常の観光ツアー等では得ることが不可能な多様な専門家の案内・解説を

受けることができたことへの評価は極めて高い。これは、多分野の専門家が「郷土」という同一の地域を対象に多方面からアプローチするという総合郷土研究所の強みが生かされている故の評価であるといえ、誇るべきであろう。また、キャンパスの立地する身近な地域ではあったが「個人ではなかなか行きにくいところに行けた」「福江の町にはずっと行きたいと思っていたので、ゆっくり見学できてよかった」など、特に自家用車を持たない学生個人ではなかなか行けない場所に行くことができたことの評価、そして「やはり愛知は歴史が深いと再確認できた」などの感想から、地域の特性を今一度現地で確認し、自身の今後の学習に生かす契機となったとも自己評価できる。これらは、案内側にとっても渥美郡という勝手知った土地で企画したが故の強みを生かせたということだろう。

企画への不満や要望は、本年度は非常に少なかったが、「もう少し短時間でもまわれる」あるいは「個人的に興味のあったところに行かなかった」という、更に各所に寄ってほしいとの要望があった。渥美郡という大学からの移動時間が短く、それだけ多様な場所をまわれる企画であったが、その分参加者によってはすでによく知った場所を再訪するのは退屈な面もあったかもしれない。天候や安全のリスクもあって予定通りに回れるとは限らないため、盛り込みすぎる企画は危険であるが、企画の充実と時間配分のバランスは不断の改善点として挙げておきたい。また、集合場所がわかりにくいとの指摘もあり、これは単純に企画側の不備として改善していきたい。ともかく、好天にも恵まれ、全体として、上述のように身近な地域を今一度見直したいという今回の企画の意図は達成されたものと考えられる。しかしながら、参加定員には満たなかったことも事実で、これに満足することなく、向後一層の内容の充実と学生を中心とする参加者の増加に向けた努力を重ねていきたい。



図1 地域見学会の行程

(下図:『天保国絵図のうち三河国 (部分)』(1838年) 国立公文書館蔵・重要文化財)

表1 総合郷土研究所地域見学会 (2019年5月19日) タイムスケジュール

9:00	愛知大学豊橋キャンパス集合・出発 (9:10)
9:40	シェルマよしご (吉胡貝塚資料館)
10:45	福江漁港→大垣新田藩畠村陣屋跡
11:00	角上楼・井筒楼見学、昼食 (田原パークを用いた料理) →伊良湖開拓地を車窓観察→伊良湖東大寺瓦窯跡
14:30	道の駅伊良湖クリスタルポルト→徒歩で伊良湖岬・恋路ヶ浜を散策
15:50	出立→豊川用水万場調整池
17:00	愛知大学豊橋キャンパス到着・解散

表2 地域見学会参加者アンケート回答結果の集計 (回収20件)

問: 企画への満足度		問: 参加のきっかけ (複数回答)		問: 来年も参加したいか	
大満足	15 (9)	チラシ・掲示をみて	8 (13)	ぜひ参加したい	12 (6)
まあ満足	4 (12)	先生や同僚に誘われて	8 (6)	企画次第では参加したい	6 (15)
普通	1 (1)	友達に誘われて	2 (4)	参加する気はない	0 (0)
やや不満	0 (0)	その他	1 (2)	わからない	1 (1)
不満	0 (0)	無回答	1 (0)	その他・無回答	1 (0)

※ カッコ内は昨年度の参加者アンケートの結果 (回収22件)

(6) 資料整理作業報告

2019年1月から12月までおこなった収蔵史料の整理について簡単に紹介する。

1. 三河国幡豆郡江原村村松家文書

(史料群No.296)

2018年に購入した史料684点。土地売買証文・質地証文・借金証文・年貢勘定書などが多い。

2. 三河国幡豆郡小牧陣屋(大多喜藩)文書

(史料群No.297)

2018年に購入した史料5点。小牧陣屋は西尾市(旧吉良町)に所在する上総国大多喜藩大河内松平家の陣屋。支配していた幡豆郡21ヶ村・碧海郡4ヶ村・加茂郡10ヶ村の村高帳(天明6年)を含む。

3. 三河国八名郡賀茂村賀茂神社竹尾家文書

(史料群No.298)

2019年度購入史料。総点数190点。山城国愛宕郡の賀茂県主の苗裔で、享禄年中に今川家の家臣彦坂氏の招きにより、賀茂村に移住、以後、明治期まで賀茂神社の神主をつとめた家である。同神社は徳川家康より朱印100石を下賜された。

神祇管領長上吉田家との神道裁許に関わる書状、「半原藩公儀并半原御役所御触諸事留」、御朱印改めのために出府した際の日記、明治天皇の東幸に関する書状などを含む。

4. 遠江国周智郡三倉村文書

(史料群No.299)

2019年度購入。総点数52点。明治初期の地積測量図が多い。なお周知郡間詰村・鍛冶島村・亀久保村3ヶ村の聯合役場の史料「御指令綴」(明治15年)、大鳥居村外六ヶ村の聯合村役場の「諸願伺届綴込」(明治14年)が混在している。

5. 美濃国恵那郡田瀬村山田傳右衛門家文書

(史料群No.300)

2019年度に購入した6点。田瀬村の新田開発・寺の創建・山論・災害・など天正13年から宝暦4年までの記録を書き留めた「田瀬村古来記」がある。

6. 三河国額田郡西阿知和村文書

(史料群No.301)

2019年度に購入した9点。安政4年から慶応4年までの宗門改帳。

7. 三河国幡豆郡津平村大竹家文書

(史料群No.302)

2019年度に購入した11点。宝暦～明和の田畑名寄帳のほか、天明以降の鳥縄獵船に関わる史料2点が含まれる。

8. 土尾所屋および信州田本綿屋文書

(史料群No.303)

来歴は不明。史料点数65点。段ボールには「未整理古文書No.31 三州新城松田屋白木屋ほか仕切状送状 / 未整理古文書No.32 尾州名古屋桔梗屋他送状」と書かれていたが、箱の中で明確に分別されていなかった。①信州田本の綿屋政五郎・新三郎宛と②土尾所屋新三郎宛との2つに分けられ、いずれも商品代金の仕切状類であった。元来別の史料群だったのか不明のため、当面1つの史料群として扱う。

9. 幡豆郡家武村近藤家・愛知郡下之一色村正雲寺・静岡県志太郡和田村村上家ほか混在文書 (史料群No.304)

1990年に古書店より購入した3箱の内の一つ。残り2箱は虫の駆除作業中。大きく3つの史料群が混在していた。今後残り2箱の整理を行い、全体で検討する必要がある。

今年度整理した1箱には293点の史料があり、幡豆郡家武村近藤家史料には近世～近代

の借金証文・土地売渡証文が多く、愛知郡下
之一色村正雲寺と志太郡和田村村上家の文書
は近代文書のみ。

10. 三河国八名郡牛川村松坂家文書

かつて整理された部分で、番号の振り方や
内容の取り方など、現在の方針と異なる部分
の訂正を行なった（継続中）。

（滝井友子・荒木亮子）

(7) 展覧会

期間：2018年11月16日（金）～
2019年2月23日（土）

テーマ：考古遺物展

会場：豊橋校舎大学記念館

期間：2019年3月22日（金）～6月29日（土）

テーマ：古文書が語る豊橋・渥美

会場：豊橋校舎大学記念館

期間：2019年11月1日（金）～
2020年3月19日（木）

テーマ：和装本の世界へようこそ

会場：豊橋校舎大学記念館

愛知大学総合郷土研究所「紀要」投稿要項

1. 著者の資格
 - (1) 所員
 - (2) 非常勤所員
 - (3) 研究員
 - (4) 補助研究員
 - (5) 総合郷土研究所運営委員会が認めた者
2. 対象とする空間領域
東海地方および隣接諸地域とする。
3. 原稿の種類
 - (1) 論説
 - (2) 研究ノート
 - (3) 資料（史料）紹介
 - (4) 講演及び討論記録
 - (5) 書評
 - (6) その他
4. 著作権
 - (1) すべての著作権は総合郷土研究所に属する。
 - (2) 執筆内容が第三者の著作権を侵害するなどの指摘がなされ、第三者に損害を与えた場合は、著者がその責を負う。
 - (3) 「紀要」に発表した論文を著書などに転載するときは、所長の許可を得る。
5. 愛知大学リポジトリへの掲載
 - (1) 原則として、「紀要」は全文を愛知大学リポジトリに掲載する。
 - (2) 愛知大学リポジトリへの掲載を希望しない著者は、原稿提出時に掲載しない旨を原稿添付表紙に記入し、提出する。
6. 編集担当委員の権限
 - (1) 紀要の編集は、総合郷土研究所運営委員会構成員の中から選出された編集担当委員が行う。
 - (2) 編集担当委員は、原稿の対象とする空間領域が2に適合しているかを判断する権限を持つ。
 - (3) 編集担当委員は、原稿の内容に関わらない紀要全体を通しての体裁及び形式についての権限を持つ。
 - (4) 編集担当委員は、著者が提出した英文タイトル及び氏名を、適切な手順を経て修正する権限を持つ。

愛知大学総合郷土研究所「紀要」執筆要領

1. 執筆言語は和文とする。
2. 原稿は原則として電子媒体で作成し、図表も含めて完全原稿とする。
3. 原稿は横書きで作成し、A4判で1ページ40字×40行で15枚以内とする。
4. 数字は算用数字を使用する。暦年は専門分野の習慣による。
5. 図表にはそれぞれ通し番号を付け、図の表題は図の下に、表の表題は表の上に記載する。
6. 注記は本文の該当箇所の右肩に注記番号を付け、原稿の末尾にまとめて記載する。
7. 引用・参考文献の表記法は専門分野の習慣に従えばよいが、著者名、書名または論文名、雑誌名（号数）または発行所（者）名、刊行年、該当ページまたは総ページ数を記載する。欧文文献の雑誌及び書名は、イタリック体（または該当箇所をアンダーライン）で表記する。
8. 原稿提出時には、英文のタイトル及び氏名等を記載した原稿添付表紙を提出する。
9. 電子媒体で作成した原稿は、電子記憶媒体と印字紙を提出する。
10. 校正は2回以内とする。校正は原則として誤字脱字のみとし、大幅な変更は認めない。
11. 補助研究員は所員の指導と校閲を経て原稿を提出する。

2019 年度研究組織〔所 長〕山田 邦明

〔所 員〕阿部 聖 飯塚 隆藤 岩崎 正弥
印南 敏秀 宇佐美一博 檜村 愛子
加納 寛 神谷 智 木島 史雄
近藤 暁夫 迫田 耕作 須川 妙子
鈴木 誠 高原 隆 早川 大介
樋口 義治 樋野 芳雄 廣瀬 憲雄
安 智史 安福恵美子 山田 邦明
和田 明美

〔非常勤所員〕有蘭正一郎 安藤 勇 市野 和夫
伊東 利勝 井口 喜晴 伊村 吉秀
交野 正芳 加納 俊介 佐野 賢治
沢井 耐三 杉本 一郎 高橋 貴
武田 圭太 田崎 哲郎 玉井 力
西尾林太郎 西堀喜久夫 藤田 佳久
別所 興一 堀江登志実 宮入 興一
渡辺 和敏

〔研 究 員〕天野 景太 荒木 亮子 岩原 剛
内浦 有美 大久保あかね 大崎 洋
栞原 将人 権田 浩美 佐藤 泰子
高木 秀和 高橋 賢 橘 敏夫
塚本弥寿人 佃 隆一郎 内藤 聡子
内藤 路子 長屋 隆幸 西尾 美德
野田 賢司 菱川 晶子 日比野浩信
平川 雄一 藤井奈都子 藤喜 一樹
古田 功治 保住 敏彦 松岡 敬二
松田香代子 松村 美奈 三世 善徳
村瀬 典章 森田 実 山下 智也
和田 実

〔運 営 委 員〕(庶 務) 近藤 暁夫
(資料収集) 廣瀬 憲雄
(企 画) 近藤 暁夫
(紀要編集) 飯塚 隆藤

〔事 務 局〕小林 倫幸